

# 柂城

大隅加治木同鄉會

第四號

明治四十一年四月十五日發行

# 松城雑誌第四號目次

雜

報

二八

口 繪

○專賣局加治木出張所

論 說

○産業組合に就て

○町村基本財産としての森林

通 信

○北京便り

○信州便り

○北米便り

○大連便り

文 范

○秋の奈良行

○和歌 ○俳句

雜 稱

○秋樹栽培の適地に就て

○偶感數則 (其二)

○雜 感

○福州雜錄 (繼承)

○雜 裳 (一の續き)

○隨感錄

○漫 言

○讀者之聲

○會 報

○數 件

○本會の基本金寄附者氏名錄 (第四回申込順)

○雜誌代の領收

○在外雜誌講讀者住所氏名 (申込順其三)

○會 告

○四三

○入 部 泰 造

○圖 師 政 次

○野 田 昇 平

○波 多 市 松

○小 野 助 四 郎

○日 高 勇 七

○一 三

○池 田 弘 案

○員 動 靜

○賀會 ●名譽なる馬 ●石原農商務省技師の講話 ●長途騎兵乘車の通過 ●新知事の來加 ●美事一束 ●衆議員選舉有權者調數 ●學事一般其三 ●小島小學校の狀況 ●本村同盟教育會と教員會 ●各小學校証書授與式 ●學藝會 ●中學校舍の一部落成 ●中學卒業生 ●商船校入學者 ●會員動靜

●年始會 ●招待と送別 ●專賣事業と加治木出張所 ●稀有の積雪 ●紀元節の祝宴會 ●蔬菜品評會 ●旅團設置 ●上

村農會長の表彰 ●上戶黨の福音 ●小濱氏慰勞會 ●磯島

知事交迭 ●種痘 ●紀念碑の起工 ●稻荷神社の移轉 ●上

津公爵家令嬢の來加 ●島津男令嬢の墓參 ●陸軍紀念祝

賀會 ●名譽なる馬 ●石原農商務省技師の講話 ●長途騎

兵乘車の通過 ●新知事の來加 ●美事一束 ●衆議員選舉

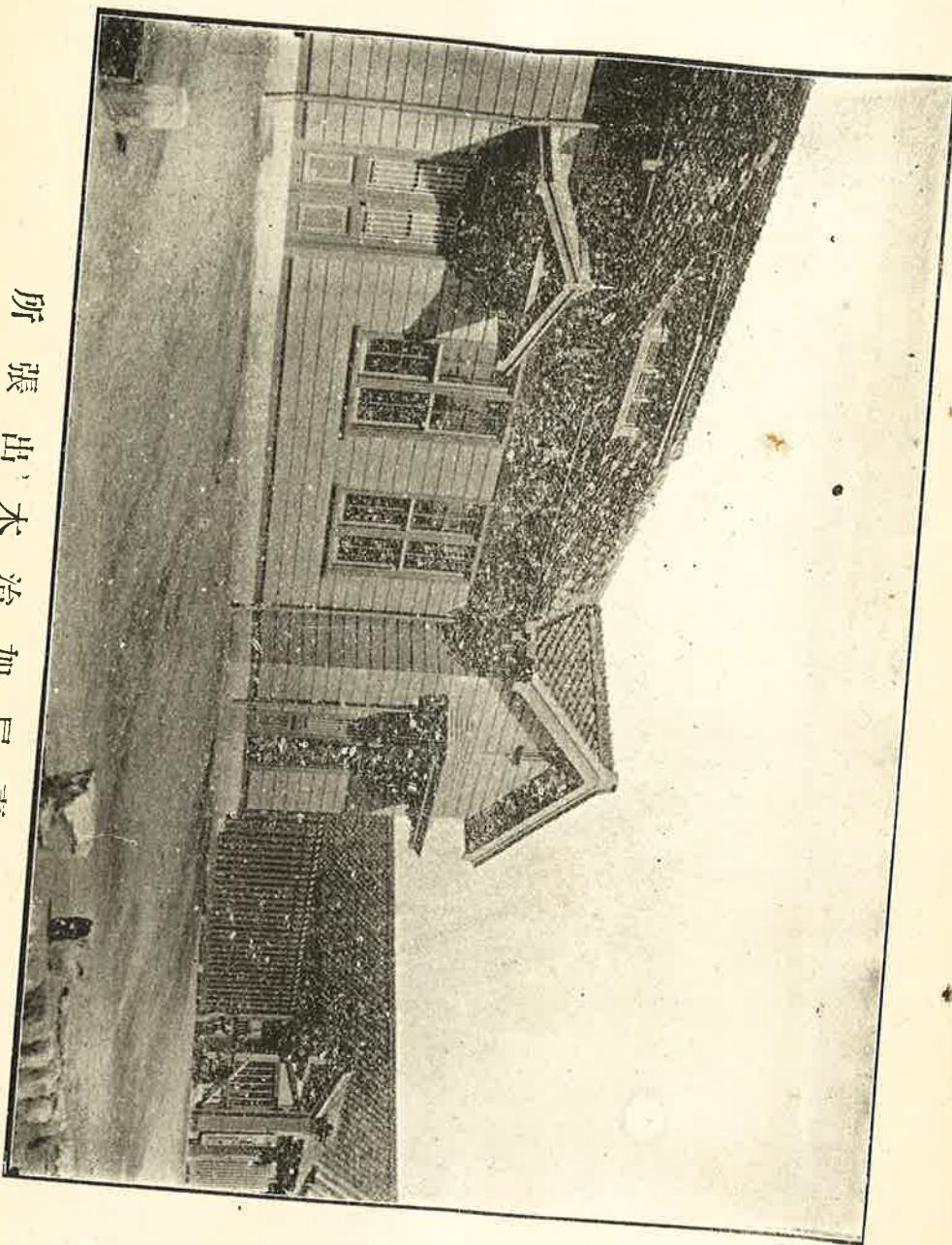
有權者調數 ●學事一般其三 ●小島小學校の狀況 ●本村

同盟教育會と教員會 ●各小學校証書授與式 ●學藝會 ●

中學校舍の一部落成 ●中學卒業生 ●商船校入學者 ●會

員動靜

所張出木治加局實事



# 桙城雜誌第四號

## 論說

### 産業組合に就て

諸言

在神戸高等商業學校

入部

泰藏

明治三十三年法律第三十四號により産業組合法發布せられし以來同組合の効果一般に認められ近時其數は逐年増加し同年末日に於て其數廿一に過ぎざりしも卅七年末日には千〇十九となりぬ然るに我鹿兒島縣に於ては卅八年末日に於て僅々四拾四に過ぎず更に始良郡にては僅に二個を數ふるのみなり元來此の組合たる一地方に於ける産業發達に益する所大なるは勿論共同一致の美風を造り勤儉貯蓄の氣風を養成するに大なる力ある事明なり之れ余が薄誠淺才なる黃頭兒なるをも顧みず此の稿を草し以て産業組合に關する一般的觀念を供せんとする所以なり然れども下手の長談議に陥入るを恐れ此處には其性質種類等の概畧を述べるに止め各組合の利害得失設立要件及び手續等は畧せり

#### 第一 産業組合の起因及び性質

近時大企業起るや之れ等大企業者は其農富なる資本により大仕掛に多量に生産し從つて生する生産費の節約により廉價に販賣し其熟練なる技能により品質の改良を計り且其取引の機敏なる等の点に於て小企業は益々壓倒され遂には其の壓迫に堪へずして遂に倒産又は罷業の悲運に際會する事應々に見る所なり試に思へ令此處に數拾百萬圓の大資本を有す工業會社ありとせんに彼れば學術經驗共に備はれる斯道の専門家を聘して技師となし

顧問となし新發明に係はる機械を用ひて分業等の新組織によって多量に廉價に且つ良品を生産すとせば舊式の技術器具を以て生産に從事する小手工業者が之れに對抗せんとするも能はざるは識者を待たずして明なり即ち所謂弱肉強食は此の間に於て最も適切に行はるなり然れども此風たる今日經濟界に於ける趨勢にして技術の進歩交通機關の發達に伴ひ其の勢の止まる所を知らず從來獨立せし手工業者は大工場の職工と變じ小農者は大農者の小作人と化し世は資本万能の世となり大は益々大となり小は益々小となり一國の基礎を造り其中堅たるべき中產者は漸減、貧富の差は益々大となり頗る不安なる社會狀態を呈すべし此の勢は徒に放任すべきものなるや

抑々大企業は廉價に多量に而も良品を供する、以て國家經濟の發展上より見る時は頗る有益なる組織なりと云へるゝ社會經濟上よりする時は貧富の差を甚大にし分配を不公平ならしむる物なるを以て一國の完全なる經濟上の發育をなすには大企業の暴力を抑へ以て堅牢なる中等實業家の地位を確保するの手段即ち大企業に對する小企業家救濟の手段を講すべきなり然れども今日の國際競爭場裡に立ちて列國と勝を争ふに際しては大企業は極めて有用なる唯一の武器なるを以て其救濟策たるや宜敷積極的なるべきなり即ち大企業は其の進むに任せ其の壓迫に對し小企業を保護するの策を取るべきなり此種の策たる頗る多かるべきも最も完全に保護するの法は小農小工業者をして自助自立の精神を養はしめ勤儉貯蓄の美風を發揚せしめ、かくして得たる金を集めて大なる資本となし斯くて數人數十人乃至數百人が集めたる資本を以て共同の利害と共同一致の精神により大企業の壓迫に對抗すべきなり此の方法手段にて出來たる小農小工業者の集りを產業組合と云ふなり

## 第二 種類

產業組合の分類法は國により異なる従つて其の種類の如きも種々あり然れども產業組合法第一條に依り之を分つ時は次の四種となすを得べし

### 1、信用組合

### 2、販賣組合

### 3、購買組合

### 4、生產組合

然れども我が法律にては兼業を許すを以て生產販賣組合・生產購買組合・生產販賣購買組合・生產販賣信用組合・購買販賣組合等も生ずるを以て其種類は多類なりと知るべし

## 第三 信用組合

產業組合法第一條第二項に「信用組合は產業に必要な資本を貸付け又は貯蓄の法を講ずる物なり」とあり即ち此組合は共合の力を以て資金を集め以て信用を高め大企業の競爭に對して小企業者の獨立を維持するを目的とする組合なり

此の組合にては一市町村又は其の以内の區域より募集せる組合員をして自助獨立の精神及び勤儉貯蓄の美風を養はしめ斯くして得たる零細なる資金中より定時に定額を拂込ましめて組合の資本となし此の資本額を大とするに従ひ次第に組合の信用を高め以て組合の名義にて低利なる資金の借入れをなし之れを低利にて組合員に貸與するものにて資本信用借入金三基礎の上に立つ組合員のみの小機關銀行の用をなすものなり之れを要するに此の組合の目的は資金供給にあるを以て本村の如き金利割に高く且つ金儲機關なき土地にては頗る適當なる物と云ふべきなり

## 第四 販賣組合

產業組合法第一條第三項に「販賣組合とは組合員の生産せる物に加工し又は加工せずして之を販賣するを目的とする物を云ふ」とあり即ち此の組合は合同の力にて直接に製品販賣し中間に立つ商人に利益を壟斷さるゝを防ぐとする物なり得ず以上二原因のため彼等は其製品を奸商等のため不當の低價にて買占めるゝ事多し之れを防ぐため共同

の計算にて組合を造り組合には商的智識ある専門家を傭ひ置く時は彼等小農等は製品を相當の價にて粗合に賣り組合は一定の量に達せる時適當なる時期に相當の價にて商人又は消費者に販賣するなり而して組合の得たる利益中より組合の費用を差引き尙餘りある時は組合員に分配す之れを要するに此の組合にては賣り急ぐの用なく且つ世事に長トたる管理者あるを以て惡仲買入等のため安く買ひ倒さるゝ事を防ぎ得るなり

### 第五 購買組合

此の組合は販賣組合と全く反対の場合即ち物品購入に際し仲買商人のため暴利を貰らるゝを防ぐを目的とする物なり之を分ちて二とす

1、原料購買組合 肥料種子農具等の如き農業上の原料器具を共同に購入し之を小農等に分配する組合を云ふ殊に肥料種子農具等の新なる發明ありとモ世事に適せぬ百姓等は之が使用法は勿論名稱さへも知らぬ事應々あるべきを以て之が組合に長たる學識經驗ある者は之を組合員たる百姓に紹介し共同に購入（物は一時に多量を買へば割易となる）する事とせば農事改良の一助ともならん

2、消費組合 同様く購買組合なれども購入の目的物異なり日用品の購入を目的とするものにて家計的組合なり其故同一社會階級に屬する人々間に最も行はれ易き物なり之れ此の組合が諸官廳會社學校等にて實行さる所以なり（分配價格等に就き種々の方法あるも畧す）

### 第六 生産組合

產業法第一條第四項に「生産組合は組合員の生産物に加工し又は組合員をして生産に必要なる物を使用せしむる物なり」とあり即ち合同の力を以て資本を造り機械を買入れ労動者をして獨立を得せしむるを目的とする物なり然れば此の組合の目的は組合員の製品に加工し精製すると機械器具の使用をなさしむるにあるを以て小工業者をして小なるながらも一個の獨立せる工業者として傭主の横暴を免かれしむるの利益あり從つて自己の業務に忠實となり且つ獨立獨行の精神を養成するに効あり。

## 町村基本財産としての森林

### 圖 師 愛 林 生

我村先頃一百余町歩の森林を得、之れが經營を始められしと聞く、此れ村の有志者及村民の愛郷心に因するものにして、實に祝すべき事なり。

町村自治体として基本財産の必要は、已に濱田氏の論せられし處、更に繰り返しの要を見ず、故に余は其基本財産として尤も安全にして適切なる林業に就て少しく述ぶる所あらんとす。殊に内務省に於ては夙に此に着目する所あり、頻りに町村林經營の必要を諭告する時に當り之れが基本財産としての價値を論ずる敢て用の事にあらざるべし。

抑も町村基本財産たるや、其基礎確實にして運轉不自由且つ可成利用經營に甚だしく手のこまざるもの、又均一の年收入を得る性質を必要とす。

今吾林業に就て考ふるに、森林は農產物其他の生産資本に比して危害最も少なし、例へば米作の如きの生熟期に際し天然的危害即ち暴風雨虫害旱等の来るあらんか、直に全部或は大部分を喪ふの惧なしとせず。然かも森林に於ては尙ほ如恁天災に際するも、學理撫育の宜しきを得ば、決して全部の損失を招ぐが如き事なく、風倒木、枯損木と雖尙ほ、多少の價格を有す。又火災竊盜の如き人爲的危害は其所在地住民との關係圓滑ならば、之れまた免かるべきものなり、否却つて保護するに至るべし。又森林は他の有價財産の如く隠密に貯藏する能はず、伐採利用するども外部に表示し當事者の奸計悪策も直ちに認識するを得べし。これ森林の基礎確實なる所以なり。

次に森林は融通の自由を欠ぐが故に、町村有として最も適當なる性質を有す。貨幣其他有價証券の如きは運轉自由なる爲め原物を消耗する事容易にして町村基本財産としての資格を欠ぐものなり。之に反し森林は動産其他家屋田畠等の尽きたる後はあらずんば決して消滅する者にあらず又町村自治制なる者は町村自治の私權確

業務をなすと同時に公權的業務あり且つ政府の行政も或程度迄主管するを以て營利事業が甚だしく繁多にして莫大の費用を要せんか到底出來得べきものにあらず、これに依て林業を見るに其財産の價格及收入の大なるに比し其經營たるや實に易々たり、一旦法正の状態となるか只僅かに一二施業者を以て充分なり、從て勞力経費も少額にて足る、然るに他の生産事業に於ては、數多の收入を得んとせば巨大の施業費及専門的労力を要する故町村の能くなすところにあらず。

林業に於ては一度法正となるか客易に利用量の變更を許さざるを以て常に均等の年收入を得べし、又經濟界の變動に感ずる事最も鈍きものなる爲め、今年數多の收入を得るも翌年一文の收入なき商工業とは同一の比にあらざるなり、即ち林業收入は經常費に充當するに最も適する者たらん。

林業が町村自治体の基本財產として斯く完備せる性質を有するに於ては之れを以て我村の利用厚生の真と爲す誠に一日も忽にする能ざるものにあらずや。歐洲各國が唯一の町村基本財產とする實に他なき也。尙森林が町村有となれば公共的利益即ち其收入は直ちに村民の利益となるは勿論其經營は共同心の獎勵と成り殖產興業を盛ならしめ貧民に職業を與へ、教育の進歩に資する等効益枚舉に遑わらず、斯くの如く林業が町村自治体と親密なる關係あるに至りては自治体を發展せしむるは林業其大部分を占むると云ふも過言にあざるべし。欄筆に當り我村の現狀を見るに租稅の如きは、最高限の重稅を賦課するが如し、今後國運の隆昌と共に町村に於ける經營の増大は尙ほ今日の比にあらざるべき。果して然らば村民は益々血稅に泣かんのみ。何れの時か幾分の餘裕を感じ、太平の恩澤を謳歌するの時あらんや、擊壞鼓腹休養の時期至らんや。我村か財產より得る收入は僅かに一千二百余圓にして歲入二十分の一を占むるのみ、其重なる年收入の租稅なること表に依て明なり、此に於て余は村有林を大に擴張し合理的に施業し以て村民の負擔を輕からしめ、村の發展を計られん事を切望す、これ將來の問題にあらずして現在の問題也。理想にあらず刻下の急務也。

余未だ黃口、いふ所疎漏なきを保せずと雖も徒に机上の空論となすなく、幸に誠意のある處を諒知せられなば幸甚。

(孝明天皇祭當日稿)

## 通 信

### 北京便り

清國北京大學堂 野田 昇平

拜啓各位益々御清適の段奉賀候、雜誌桜城正に落手仕り深く御禮申上候、初號は宮崎に在職中頂戴仕り當時多忙の際に御禮狀も打忘れ居り候處、爰に第二號の御送付を辱うし其御厚意に對して不行届の段今更汗顏の至りに候、雜誌桜城が如何に目下の小生を慰めしかば別に申述ぶる必要も御座なく候、在郷先輩諸氏の如何に桜城の發達に御盡力なさるゝか亦多年音信不通なりし舊友君並びに先輩諸氏の御近狀も能く相分りれりの慶事にて、遅れ馳ながら我愛すべき故郷桜城の今後益々繁榮せんことを祈り併せて此の親むべき雜誌桜城の健全なる發達と在郷在外諸氏の御成功とを望み申候、

（七）  
城  
椿  
（六）  
城  
椿

觀察仕り候間左に少しく申述べ候、今や世界到る処各國利害の馳逐場たらざるはなく候へ共支那に於ては殊に甚だしく北京は其外交的驅引きの中心にて候へば、其活動の有様手にとる様に見ゆるころ面白く御座候、武裝嚴然たる各國兵士の立番せるなぞ北清事變の當時のばれ申候、在留日本人七百餘名公使館銀行郵便局警察署さては軍隊迄駐屯して殆んど内地同様の感有之申候。外國に出づれば國旗の御威光有難く感せられ吾等日本人の躰面に關することぞ思へば些少の事にも及び小生共の學校にも此現象を現はし英米獨佛日本の教官各々其本據を確守致し居り候、小生共の倚する微々たる一脚の椅子も皆是日本勢力の一角と思へば決して無責任の事は出來申さず候、ふる事情の下に真正の教育が行はれ得るかは疑問にて候、外に日本人の經營せし支那人が果して吾人の熱誠を感謝し學生がより熱心に其業を勉むるかは頗る疑問にて候、支那人は一体不可解の人間に小生共學校の實狀も一向不可解にて候、學

生五百有餘外國人二十人餘支那人五十人餘小使奴僕の類二百餘名の由中々の大仕掛けにて不經濟なる事可驚るもの有之候、十八省の撰拔生を集めしものなれば支那各地の人情を知るには好都合にて小生其の受持の中にも南は雲南より北は奉天の人々を集め居り候、市中人馬の往来繁きこと東京の比にあらず其服装の奇異なる其建築の雄大なるには大に感服仕り候、色々通信致し度き事は多々有之候へ共此度は之れにて御免蒙り申候、雑誌の余白をかり今迄の疎遠を詫び併て上述の大略を諸彦の机上に呈するを得ば幸也。

### 信州便り

波多市松

新年の御吉慶萬里同風日出度申納候近來郷里の状況一般に向上發展の氣運に向ひ候事偏に先輩諸君が御尽力の賜と遙に感謝仕候身常に外にありて懷郷の情轉た切なる生等にとりて貴紙の到着は實に天來の福音に接するの感有之申候左に聊か信州の現況御通知申上候

一、信州は御承知の如く南北五十余里に亘れる日本一の高原地方にて人情風俗も南北各其の趣を異にし北信は粗野率直にして南信は所謂名古屋氣質の処多く有之候も一般よりいへば山地の氣風を存し自尊偏

狹の失は免れざるも又一種別巧の廻り有之「信州猿」とは能くも評したる者に御座候或人は信州人は其初めにおける鼻息は猛烈にして當るべからざるが如きも一たひ之を挫き呉るれば案外興みしやすしと申居候政黨は政友會稍々優勢にて政友非政友相對峙候も別に縣治上著しき障害もなく縣會に於て決定せる四十一年度の縣歲出入豫算は各二百八万余圓に御座候富みの度は好良の方にして大財產家もなき代りに又極貧民も少く財産は比較的平均せられ他にて見る如き乞食は皆無にて如何なる貧民窟も他と余程相違候様察せられ候之れ全く蚕業發達の結果ならん

二、教育は十數年前に於て多大の好評を受けしたる例の鼻のみ高くなり稍々沈滯の傾きありしも近來漸く覺醒し來り候様に御座候中等程度の公立學校は左の如くにて男子師範學校にては清國人の師範教育をも引き受け居り申候

明治四十年四月に於ける入學志願者及在學者調

師範(男 女)	八 學 者 志 入 學 者		入學者百 人に對する		在 學 者	人 口 一 万 人に對する	
	四 六	三 〇	六 八	五 〇		四 七	三 〇
學校(各一校)							

隆盛を極め小生も庭球狂の一人に御座候

目下の人氣問題は來年度よりして本縣に設立せんとする文部省直轄の高等蚕業學校の位置争ひにして長野・松本・上田・諏訪・飯田、各々文部省よりの條件即ち拾五萬圓(他に拾五萬圓は縣の寄附)の寄附を諾して必死の運動中に御座候

三、産業の主なるものは申上ぐる迄もなく蚕業にて養

蚕は春夏秋蚕共に佳ならざるなく氣候は乾燥にして爾は之を一年間貯藏し置くも徽の生へる憂なく實に天然の蚕業國にて俗間蚕を呼ぶに「御蚕様」の尊稱を用ふるによりても地方人士の蚕業に對する態度の一斑を察し得べく就し上田地方の養種飯田地方の養蚕諭訪地方の製糸は各頭角を顯はし居り申候今左に我下伊那郡(即飯田地方)に於ける明治三十八年中の概要を示せば戸數二万六千三百三十九戸桑畠反別三万三千六百四十六反歩にて春夏秋蚕の成績は左の如くに候

飼育戸數 收繭石數 平均收繭石數

春蚕一〇、五八五 二九、七五三石 二石七七四  
夏蚕一一、四一八 一二、七〇〇 一、一一二  
秋蚕一一、七八二 一一、二二六 一、九五二

計 五三、六六九 四、八三九

北米便り

舊姓伊丹 小野助四郎

養蚕業は他の農業に比し収益頗る多きを以て今や普通の田畠は年々變して桑園となり從て米麥蔬菜は漸次其收穫を減ト本郡のみを以てしても年々米三四万石の不足を告ぐるに至り蔬菜の類の高價なるは東京

以上にて候毎年六月より十一月迄に於ける農家の財囊は温裕にして贅澤に陥り待合なぞの繁昌は豫想以上にして此裏面には幾多の罪惡潜伏いたし一般の農家に比すれば余程浮華に傾き申候

飯田地方に於ける第二の産業は元結製造に候勿論以前に比して幾分衰退せしは事實なるも今日にても猶は製造者二百三十八戸（一戸平均四人の職工あり）にして一ヶ年の製造高參拾余万圓に上り申候然るに元結の唯一原料たる楮紙に要する楮の產額年々減少して楮紙價の騰貴せるのみならず當地の如き賃銀の高き処にて勢ひ元結の價格を高くせざるべからず之れ當地元結業者の尤も苦心せる処に御座候此は我郷里製紙家並に經世家の注目に價することにてはなきやと存せられ申候萬一詳細に御調査の必要あらば出來得る丈け御手傳申上ぐべく候敬具

前略——今や在米全邦人は、桑港加奈太に於ては不景氣なるも、當ビクトリヤは人氣宜しき故當に移轉し来る者日に増し多數に有之、殊に鹿兒島縣人多く最も勢力有之候。

既にかく多數の縣人集まりては、相互の親交を計り得る組識の必要を見る。況んや今後尚ほ日を追ふて増加せんとする見込みあるに於ては、一層團結の必要を感じ、去る一月一日の佳辰をトし、同縣人集まりて迺に故國の新年を祝すると共に、ビクトリヤ鹿兒島縣人會なるものを設立致し候。主旨は専ら在ビクトリヤ同縣人相互の利益と、後進の便利を計る目的と致し申候。今後當地へ渡航の人は本會の事務所へ御照會めらば、出來得る丈け御便利を計り可申候間此旨廣く同郷の士へ御傳へ被下度候。

當地は英領ビクトリヤにて邦人の移住者二百名に近く、殊に縣人の數は四十七八名に及び皆孜々として奮勵しつゝあり申候。當港はバンクーバー島にある要津にして大平洋を横行する汽船の出入夥多、殊にミシソタダコタの如き巨舶さへ容易く棧橋に横附といふ具合

ひにて、合衆國に行く者、バンクーバーに行く人は皆

當地へ上陸致すことに候。當港附近には鎮守府もあり、ドックもありて今後の發展大に括目すべき者有之候。邦人の人氣は白人側にも宜き方にて邦人の勞働口は割合に多く、日本商店大小十有二軒有之候。

夫れ時は來り候。進興國の民衆たる我等がみち来る潮に帆をあげて世界の上に潤歩する時は來れり。外にある者と内にある者とに論なく一意向上の一路を辿りて、大和民族の使命を天下に行ふ時は來りたるにて候。終りに臨んで諸郷の健在と桜城の發展とを祈り申候

時計が午後九時を報する。滞まつて居た電報も較々くなつた目を見張らねばならぬ當直勤務といふのがある。

時計が午後九時を報する。滞まつて居た電報も較々かたづいたので午後十時退の連中は火鉢や暖爐の周圍に圓形を書いてたわいもなき雑談に耽る。若し壹萬圓の債券に當籤せば早速この仕事は廢業して金貸業に改業するといふのがあれば、否吾輩は洋行をやると混せかへす奴があるかと思ふと、片隅からやれ満州經營だの、坂國樂隱居のと得手勝手な熱を吹きながらも本

性違はず皆眼は、ちよ、いくと時計の方に向いて、針の遅きをまざまざしといはん計りの顔附、早や十時少し前には奴等餘々退去の仕度をなしつゝ、飯して呉れど口にはいはねどろれどなく種々の相圖をなす。けれども主事は机に對つて日誌に餘念もないのか、又は故意と氣付かね風を裝ふのか、一向感トのない容子、やがて十時が鳴る。主事始めて机を離れて各線を巡視して退きの連中、宣敷賴むの一言でろこくにして退廳する。殘るは僅に當直員五名、滿廳寂として只時計の音のチクトクと冴を渡るのみ。當直員五名を二分して、三名を前徹（午前二時迄）二名を後徹（午前三時より同七時迄の留守番）後徹は音信事務閑なれば午後十時頃には當直室に入る内規で殘る三名は各線機械の異狀なきを検査し、火鉢に暖を取る。更闇くるに従つて次第に居睡りを催すも大切な職務を擔へる身の、流石に安心して眠るわけに行かぬのである。併乍不斷無休の仕事をなれば疲た切つてグツタリと気持ちよく椅子に靠れて居睡りするもある。かゝる時デン／＼とけたゞましい呼鈴の音、ハツと驚きさめて我にかへり、急遽連呼して居る機械にかゝれば「左様なら」の一言でだんま

りとなる。腹立たしさ。斯様な時若し晝夜を問はず参  
拾分間以上連呼に氣附かずんば、應答延滞で報告され  
、手續書一通徵發、輕きは大目玉頂戴、重きは譴責か  
、訓告である。午前二時三時頃の辛さ實に金も命も入  
らないと云ひ度なる。殊々各班に於ける滿洲名物の酷  
寒見渡す限り銀色芥、窓は二重窓とはいひ乍ら、遠慮  
なく此處彼處からピュー／＼進撃する寒風ろれは酷い  
。暖爐も數個あるのに火は熾におこしてあるけれども  
毫も暖かさを感じぬのである。待ちこがれた午前三時  
は後徹者交代の時刻だ。當直室に行き、交代し、と  
少さき聲にて喚ぶも一向目さむる様子はない。餘りに  
大聲を發せば全員の安眠を妨害するのでやつと搖り起  
し交代して床に着いても、寒いゞたら三枚の掛布團三  
枚の毛布では到底暖を取ることは出來ない。加之此寒  
さにも僻易せばころ、豪慾一方の支那人の砂糖饅頭賣  
りが、かるる深夜も尙ほ可笑なる日本語にて「サトマ  
ンジユ、スクイデナー／＼」と呼び居るので暫時は眠  
る事は出來ぬ。午前五時頃よりは支那人の苦力共喧嘩  
口論の如く大聲を發して往來するし、遂に一睡し能は  
ざることは稀でないのである。早や時間が六時七時を  
報すれば後徹より電鈴を以て起床を促すので、あたふ

だろう、熱心—熟練—成功、蓋し普遍の眞理ではある  
まい。

## 文苑

秋の奈良行 池田孤雲

金風蕭颯、秋は浪花の天にも更けて、風露冷かに氣澄  
む十月廿七日、此日一日を大阪有志俱樂部第四回陸上  
大運動會は、地を錦織りなす奈良の都にトシ、會員三千五百を載せたる臨時列車は、午前六時三十分と云ふ  
に湊町驛を發するのである、僕も亦當日同會に臨むべ  
く招待を受けた、世の花に浮かれ月に醉ふ人はさも思  
はド、一年三百六十五日而かも朝から晩まで氣の緩む  
時とてはなく、殆んど幽閉の境に日を送る僕に取つて  
は實に千載一遇なのでドウしても之れが天與の福音ど  
しか思はぬ、如何にかして行きたいの一点張り矢も楯  
もたまつたものでない、岩を透す一念は遂に無理算  
段にも叶ふてサテ、

當の今日、用務の都合で大阪驛（梅田）から城東線午前  
七時十分發の列車を捉ふべく餘儀なくせられて、天王  
寺へ着いて本線奈良行列車はと問へば四五十分の後な

た機械室に至れば各線よりも連呼して居る。顔を洗ふ  
閑もなく鉛筆を手にして送受するとは全く容易の事で  
はない。これが遠く故國を離れて孤劍異境、土に一大  
飛躍を期した自分が生きてゐる甲斐の事業かと思へば  
萬通にのぼり事務多忙なること言語に絶るので。電  
報は至極秘密にして他に漏すべからずといふことは服  
務條令第一條にあるので、一個人に關することは勿論  
、國家の大事に關するろれころ天機洩らすべからず的  
のことわれ／＼は知ることが出来るのだ。愉快な人  
事ながら微笑を禁する能はざることや、又は悲しい、  
哀れな、發信人受信人の身の上を思ふて、不覺同情の  
涙に咽ぶやうなことも多い。

是等の點に於て、自分等は常に活きた新聞、活きた  
詩、小説、眞面目なる人生の第一義に接觸しつゝある  
のだ。爲めに自己を顧みる機會も多い、これは自己が  
撰んだ職業の庇陰と感謝して居るので。

電信事業も熟練後は實に易々たる職務であるといふ  
事は敏腕家のに僻にいふ事だが勿論何の事業でももうう

らでは着かぬと云ふ、是れはしたり南無三寶！夫れな  
ら乗るのぢやなかつたに……などと愚痴をこぼし  
も追付かない、見廻せば僕と此敗を共にした客は百に  
餘つて居る、マ、よ旅びは道連れ世は情けだ、連絡列  
車も知らずして飛び乗つた身の不仕合せ、朝鮮ハイカ  
ラはこれで困るので、ソウ云ふ内にも漁車は来るだら  
う、と『アラツトフォーム』の「ベンチ」に腰打ち下ろし  
、コ、「デヤンクション」の發着劇しき客車貨物に見入  
つて巻煙草の三四本も燻べたかと思ふ頃、轟とばかり  
馳け入つたのが是れが待ち設けたる奈良行の夫れだ、  
見れば何れも満載、而かも臨時列車に乗り後れた連中  
牡丹の徽章が大部分を占領して居る、僕は柄にもない  
青切符の御蔭で飛び込んで見れば之れは難有い同乗僅  
かに五人だ、思ひも寄らぬ緩潤な世界、ホット一息吐  
いたかと思ふと轆轤の音頻りで汽車はハヤ構内を離れ  
て十里の黃田を縫ふて居る、見渡す限り豊年万作金糸  
攝河泉の野を彩つて、生駒、金剛の諸山は霞の眉を解  
いて空を突き、涼天淨く實に是れ昌明舊日の秋、快謂  
ふべからずである、柿の木の頂邊にキート咲く百舌鳥  
の聲も何とな、心床しく、平野、八尾、柏原驛もいつ  
か過ぎて、大和川の清流に沿ふて漁軍斷崖を駛れば

、脚下の水色銀の如く、両岸の天姿錦繡を着け、清香人の心脾に沁す、芝山、龜瀬の隧道をすぎ大和地に入つて眼を遙か彼方に放てば、微かに春日山脈を望んで眺望一變河内の夫れの如からず、玉寺、法隆寺を過ぐれば誰も目に付く鐵路に沿ふて一面の梨子畑、今は葉盡きて幹のみ寂しう棚に匐て居る、郡山の城趾中學校の白壁が左手に見ゆるよと思ふ間に、壯嚴なる春日山は呼ばゞ答へん風情で僕等を迎へ、流車は徐々と奈良の驛にと着く、時に午前十時を過ぐること十分、蜘蛛の子を散らしたるが如き群集を押退けて「ブリッヂ」を渡れば早くも目に付く石塚君「ヤー御機嫌さん」と僕が聲をかくれば驚き顔の君は「ヤー今か」と喜色滿面に溢れて莞爾々、此處にも秋は訪づれたかと云ふ様な八字鬚を一つ捻る、君は國分の人資性温和にして思慮宏遠最も友愛の情に富む僕が十年來の親友である、今互に交換した「ヤー」の簡短なる挨拶は百万遍の御辨茶羅にも優つて溢るゝが如き友情は十分に表示されて居る、僕は此地にある池上君松木君其他同郷舊友諸氏「一寸でも尋ねたいものと石塚君に聞くと、折りや悪し機動演習とやらで公務多忙の爲め會見覺束なしと云ふ、僕の豫想は全く外れて返す／＼も殘念である、止む事を

に收め下は猿澤池に臨む、秋水清く澄んで鏡を磨し時に遊魚の波に紋するさへ見へて、招ぐが如き遠山も、笑ふが如き近山も、秋景悉く亭上に集り満目風光佳哉の叫びは覺へず口を衝く、況んや亭の女中愛嬌滴らんと欲し茶最も芳しきをやである、元來下戸の僕等今先運動場で飲んだ一杯の麥酒にさへ顔朱の如くなゝに、止せばいゝものを爰にも酒は運ばれて久しうりの快談覺へず時を移し纏て午餐をも終り、去つて運動場へと引返す、今度はチヨイ視きにして亦相伴ふてこゝから東北に程遠からぬ會心の友上岡君を訪ふべく足を押上町と云ふに向ける、斯ふなつて見ると運動場に招かれたのやら唯だの遊びに來たのやら頓と分別がつかぬ、咄！行け！今日は是れ浮世一日の閑だ、勝手な理屈を捏ねて至れば是れも僕の豫報に依つて今や遅しと待ち受け顔、ようこそ御座んなれど大喜び、上岡君が去年の冬米國から歸つて以來何時も大阪に僕を尋ねて呉れるばかりで、此居に君を訪づれのは今日が始めてなので實に石塚君は初對面僕の紹介に依つて今知つたばかり、が流石は亞米利加の空氣を吸ふだけあつて取りなしがうまい、此君が書齋は東方開け豁たる原野を隔てゝ春日、御蓋、嫩草の眺望を慾にじ三山皆秋衣を着

得ず僕は石塚君と構内を出で、三條通を一直線に上三條をすぎて公園に入れば、眼潤ゝ心伸び五重塔、南圓堂は、千年の古色を帶びて秋空に立ち、興福寺を敷詰めた石塚君を別にするの思ひは自から湧く、音に名高き花の松もソコ／＼に見て進めばやがて、今日を晴れと飾り立てたる有志俱樂部の運動場、師範學校の前、博物館の西、楕圓に廣く板圍ひしたる西の入口には緑門に大國旗が交差されて居る、門守る人に「チツケット」を受け緑門を入れば、午前九時に始まつた競技は既に八回目に及んで流石に廣き運動場も萬國旗で飾られた周囲には人の山、顔知る人毎に物云ふては日咎短き秋の日に堪まつたものでないと石塚君を伴ふて來賓席に着く、此處には大阪高商、高工、中學、奈良師範等の招待競技撰手、官吏、新聞記者及實業家等の雑居である、僕等は捕魚、障碍物等數番の競争を觀て午餐と共にすぐ門を出る、時正に十二時、石塚君が件の「チツケット」に引換へた二人前の折詰を提起して樹下緩歩の狀は時分柄聊か詩趣を帶んで可笑しくもある、歩を運ぶ西南丁余五十二段の横、五重塔の南一旅亭に入る、都亭と云ふ、亭は奈良市街を一眸の中

けて呼ばゞ來らんとす、此好景に釣り込まれた僕は一刻千金の思ひ雪々ならず、話も切れ／＼二友を誘ふて此秋晴の二三時間を散步としやれる趣味なくてはやは、秋の奈良の都は境いよ／＼寂びて、名所古跡は一層の幽趣を加へて居る、今此古都の秋に對して紅塵堆裡に呼吸した炭素を吐出せば、命の洗濯は請合である、況んや二月の花よりも紅なる霜葉は到る処に錦を織りて天の美は遊子に恍然歸るを忘れしむるをやだ、若し夫れ鹿が春よりも夏よりも秋に於て最も適合したる動物なりとせば、此鹿見物のみでも奈良は秋の態／＼來り訪ふべき價値はあるのだ、見よ春日社頭數百の神鹿開處此處の紅葉散る邊に逍遙ふ風情は眞に是れ一幅の活畫！、此畫は東京にも京都にも大阪にもない、秋は一の鳥居より二の鳥居に到るに連れて深く仰、ぎ見れば春日山の古杉老松鬱蒼たる間に散見する紅葉は實に萬綠叢中紅一点の觀がある、歩を進めて春日神社より北して洞の楓に行く、一溪あり樹間を縫ふて潺湲たる其流れに沿ふて泝れば楓樹參差道を蔽ふて恰も洞中を行くが如く、秋風至つて時に梢間に入れば紅葉紛々人の袂に親しむ、淡紅濃殷相映トて紅葉の色の舞錦誰が

織りなせしか麗はしやとでも云ひたくなる、  
嫗草山(俗に三笠山)頭の淺茅は霜に枯れ、綠に誇る二  
本松、試みに山頂に登れば衣を千仞の岡に振ふの概あ  
り、身清冽たる秋風に觸れて心胸は自から洗はれたか  
のやう、

北に下り道を少し迂回して手向山は寧樂朝以來の紅葉  
の名所、菅公が宇多上皇に供奉して參拜せしもの、錦  
なす昌泰二年の秋たりしことを思へば千年後の今日秋  
の紅葉に對して懷古の情禁すべくもない、

秋の日の暮れやすく、まだ尋ねべき秋の名所は二月堂  
から大佛前近數あるものを、日もハヤ西に入相の鐘か  
うくと鳴り響き、千草に唧く虫の音も何となく哀れ  
に聞へて夕日まばゆく丹楓更に紅なるを名残りに三人  
議一決踵を廻らすこと甚だ急、ハテ落付く先は何處?  
今や暮れかゝる火燈し頃、「ドッコイショ」と腰を下ろ  
したのが是れはまた、人目絶へたる山里ならぬ猿澤池  
に程近き乙な巻の一料亭、ろの名さへ曙と呼ぶ、一二  
度は此家に覺へのあるらしき上岡君の先導で奥へと通  
る、僕は酒よりも何よりも寧ろ飯と云ひたかつたが、  
何時の間に命トたものか程なく酒肴は運ばれて盃の献  
酬漸く頻繁となる、折からやそち襯を掛して蓮歩を運

思へば僕は今夜大阪に歸らねばならぬ身の斯ふして居  
ては夜を徹しても果てさうでない、願くは終列車の間  
に合ひたいものと列車の時間を女將に問へば、二君は  
申合せたかの様に涼車は明日の朝もある今宵一夜は是  
非に泊れといみしう止める、が然し思一思してみると  
呦々たる鹿の啼くありと詩經で讀む其啼聲も、紅葉踏  
み分け啼く鹿の聲聞く時が秋は悲しき猿丸太夫の歌の  
適切まで曾て既に玩味して居る僕が、不幸にして今夜  
雨も降らざるに況して假寐の夢に落花情あり流水豈意  
ろうな問題、君子は危きに近寄らずだ黒將軍ならぬぞ  
豫定の通り退却するに如かずと決心して九時三十五分  
の急行列車に投すべく止むるをもきかで僕先づ席を立  
つ、  
されば上と三條まで見送つて呉れた二君に惜しき別れ  
を告げ、車を雇ふて停車場に走れば定刻に少し遅れて  
九時五十分ハヤ車中の人ども、微醉に陶然たる僕は  
連れなき寂しさに何時の間に夢境に入つたか、驛夫  
に夢を破られて醒むれば此處は大阪湊町又もや身は紅  
塵堆裡の人、アーチ長欠伸一つを置土産に車に駆けて  
一里の市中を家に急げば夜の十二時を越する紡績の笛

ふのが芳紀正に十九か二十の『ハイカラ』? 美人、續い

て粉面の少し年増の新蝶々に結ひなせる紅裙二美座に  
侍る、何れは山千川千の苔の生へた喰へぬ代物なるべ  
し、モツト呼べども云はぬに亭の女將が勿体らしく『  
今は他樓が忙しうて箱切れでゑらいお氣の毒様なこ  
とぞ』と辨解する、來いで幸ひソウ來られて堪まるも  
のか、三妓は孰れも劣らぬ愛嬌もい彈く、歌ふ、面白  
く興を添へて酒間を取り持つて居る、僕が、最前手向山  
で見蕩れた錦の紅葉と興孰れ、と云へば曰く云ひ難し  
だと上岡君苦笑して他を云ふ、僕は、奈良に旅びして

旅館の孤燈に此長夜、獨りかもねんと柿本人麿の嘆あ  
る人は、是の妓を呼んで瓜彈きの小酌に旅情を慰め曉  
の早きを恨むのであらうと餘計なことまで氣を廻はす  
、酒酣なるに及んで壯談快語はいよ／＼其度を増し、  
上岡君が得意の亞米利加土產、石塚君が例の罪のない  
滑稽談、僕が獨得の古今無類抱腹絶倒の笑語、ハテは  
吟する歌ふ許せコ、暫らく傍若無人の境、騒がしさ云  
はん方なしである、

誰しも同ト樂しき一日の來るまでは千秋の思ひで待つ  
が、サテ其日になつて見ると時は夢のやうに移る、偶  
々舊友と相會して昔日を語る特に夫れを覺へるのだ、

## 和 歌

野 蔟

折田 種春

をと猶袖にたまらす昨日今日

野 外 鶯

川畑 恒治

鶯の聲なかりせば打霞む

萌にし計りの野へのさ蕨

長閑に喫ける岡のへの里

吹風も匂ひ渡りて梅の花

雨 中 鶯

森山 常子

鶯の囀る聲も聞ぬきて

朝いの窓に春雨降る

竹亭春月

森山まん子

鶯は嘲つりやみて我宿の

竹のはやしに月う霞める

瀧邊 霞

外山 基藏

うち靡く霞のひまに見ゆるかな

峰より落つ 瀧の白糸

佐藤 友樹

磯 柳  
とあみ干したる蟹が磯やに

在大連 城川甚之丞

そちこちの峰の白雪とけぬれど  
またうら寒し北支那の野邊

牧 曜村

雲日吐き海金色にかがやけり今わが心よろこびにみ  
あな寂びし冷たき胴窟の世を脱けむ焰の宮に君を守

らむ

菜ながら黄金流せる花の上に春始立てよ野の朝月

夜

## 俳句

龍門會春期雜詠

桜城の隆盛 祝して

吹き配る花の噂や 春の風

濱田 飄流

○

數の許さる所なれば、各種類に就て一般に適地とせ  
られて居る所のものを略記せむ、

### 一、柑橘類

概して云ふ時は何れの土質にも適當す、されば卑濕なる土地にては好結果を得ること難し、今其最も適當なるものを擧げむに砂質壤土を含む赤色粘土の地である、往々石礫の交ざつた地にても立派な結果を見ることがあるは排水良好にして且々雨の爲めに石ゴロが破壊され果樹に適當の養分を供給するからであらう、位置は平地でも丘陵の傾斜地でもかまわぬ、殊に傾斜地に於ては南に面するものを第一とし、東南面は之に劣る、茲に一つ注意すべきは峠谷は空氣に濕氣を含むことを以て果實の成熟良好ならざること、烈風の吹き來ること多き丘陵又は山腹の斜面及其絶頂にては其成長宜るしからず、されば又餘り濕氣多き地は果實の品質を惡變する傾がある、最も適當した地質は硅砂地で其外真土、硅砂を含める粘土地及鐵を含む硅砂地等

### 二、梨類

梨は肥沃にして地盤(表層)深き土質に適し乾燥の地は品質佳良なる事實を結ばざることである、

吹き來ること多き丘陵又は山腹の斜面及其絶頂にては

其成長宜るしからず、されば又餘り濕氣多き地は果實の品質を惡變する傾がある、最も適當した地質は硅砂

一日を梅に暮すや扇和園

森山 花亭

御手植の櫻は千代の譽かな

川畑 半月

麥の伸ぶ丈つゝゆるむ你寒かな

川畑 水鏡

雪の山吉野となりて櫻かな

木村 梅雪

潔く散るも花なり咲くも花

川畑 祝扇

乗り捨てし駒嘶くや櫻散る

有馬 春朗

噴水や柳の枝にかゝりけり

西村 隅山

袖拂ふともせで見ゆる花吹雪

川畑 蘆角

右左氣迷ふ花のわかれ道

吉井 玉川

石佛に花散る宵や月臘

五郎

○

## 雜纂

### 果樹栽培の適地に就て

在札幌農科大學 曽木平八郎

人によりて倉物に好き嫌いあり如く果樹に在りても土質氣候等に好き嫌いがある、故に縣下に栽培せらるゝ重なる果樹の適地に就て記して見よう、果樹と云つても其内に多くの種類あり且各種類の其内には又多くの品種があつて夫れを品種に分ちて一一記することは紙

は梨樹の栽培に適當して居る、

梨樹は元來暖地よりも寒地に適したるものなることは種々の事實が證する所である、故に鹿児島地方の如き暖地に於ては北面に傾斜せる地を擇んだ方が好結果を得べき道理である、けれども此事に就ては實際栽培して見て兩結果を比較研究した上でなければ殊更に北面を擇ぶべきか否やは斷言するとは出來ないが、若し理屈通りに行くものとすれば傾斜地の南面及び東西面には果樹の如きものを植へ北面に梨樹を仕立つれば土地の利用上此の上もないことである、されば在來の梨樹に在りては北面の傾斜地に植ゆると云ふ様な心配は決しているまい、只比較的寒地に適する品種を縣下に移植する云ふ場合には以上の如き注意は必要かも知れない

### 三、桃類

細砂より成る土質にして之に石灰粘土の少量を混じた様な輕鬆の地味に最も適し濕氣多き土地泥土質又は非常に粘土多く且つ有機物を多量に含む土質は不適當である、又地盤極めて淺く且つ土質岩石等にして根を深く地中に入れ得ざる土地には品質良好なるものは出来ない、

### 四、柿類

最適地は粘土及び細砂より成り之に適量の有機物を混じ又は石礫を交へ濕氣の強からざる稍乾燥の土質である、概して云ふ時は各種の地味に能く成長するものなるが只細砂土若しくは瘠せ地には不適當である。

地味の如何を問はず成長するものなれど最も適當なる  
は少量の粘土と砂とより成る地にして、硅砂の地にも  
能く成育結果するものである。一般に地味甚だしく輕  
鬆はらず適當の濕氣を含む土地を選ぶべし。  
枇杷は海岸に接する地に在りては殊に能く成長結果す  
る果樹にして其名產地の多くは皆な<sup>ハ</sup>岸近傍である

卷一百一十五

偶感數則（其の二） 枝元 枝風

◎時勢の推移し行く姿は面白いものはない。從來は列國皆な國外飛躍を目的として、樽頬折衝を唯一の能事と心得て居たのが、近來は寧ろ内政を整へて實力を養ひ、着實なる基礎の上に國運の隆盛を計らんとする傾向を生じた。従つて一國內にありても、從來は大志ある者は皆な中央首府に集中して、激烈なる競争場裡に投じ、徒に功名を貪るに急であつたが、近來は此反動として、地方農村の整理が主唱され、日本に於

ひて勤勉貯蓄の美風を鼓吹し、共済組合を設け衆力を集めて資を積み、炎厄には互に相救ひ、平時には低利の資金を融通し、以て各自生業・安康を圖り、遂に利貸を排斥して今日のウエストファレンを現出せしむるに至つた。

◎要するに、自分さへ好ければ他人はどうなつても構等を導いて勤勉力行の精神と協同一致の美風の養成とに一層努力せられたならば、二十年ならずして摸範村の名を博するに違ひないと思ふ。

◎吾人は果して今日の加治木が、二十年前のウエスト・ファレンに似居るや否やは斷言し兼ねる、寧ろ加治木に常住する人達ころ、此疑問に答ふるが當然だと思ふが、万一少しでも似寄つた所があるとすれば如何にすべきか、若し果して一部少數の人々が利己一点張りで、共同生存の何者たるを解せず、撲滅なら多數農民を虐め、ひそかに謀叛を起すば、從令ノ如何程多くの別荘

教育乏しき、而かも正直なる多數の農民に同情し、彼等を導いて勤勉力行の精神と協同一致の美風の養成とに一層努力せられたならば、二十年ならずして摸範村の名を博するに違ひないと思ふ。

雜

佐多悔堂生

が建て連ねられても、少しう加治木の繁榮とも名譽  
ともならないのである。一方に立派な邸宅や別荘が建  
つても、他の一方、親子離散したり、兄弟飢に泣くも  
のがあつたならば、決して協同一致の美風と稱すると  
は出來ない、否な寧ろ奢侈贅澤の風を增長せしむるも  
の、遂には多數人の憎悪を買はんのみ。吾人は之に就

て尙ほ具体的に建言したき種々の考案を有すれども、余りに僭越に過ぐるを以て、茲には多言を慎む次第であるが、唯だ加治木の上流に立つ人々が卒先して彼の

「夙や工女の群の朝の汽車」と柳樽か何か分らぬものを口ずさむたのは去る日の朝であつた。或る大都の紡績會社へ趣く工女群が寒き冷き朝の北風に吹かれつゝ汽車に急いだ、此等は社會自然の状勢につれて生活難の爲の出稼か、將た半ば得たる収入で美装でも着けたい虚榮にでも驅られたのか、あらず、之れ全く生活難の爲であるらしい、呼されば此等の賃取工女男は、吾が

郷里でば外に出すべき所だらうか、  
◎吾が郷里は現在は勿論將來(近き遠きはいはず)必ず  
煙突林立と迄行かずとも煤烟常に空を蔽ふ底の工業地  
たらざるべからず、則ち工業地として、發展せざるべか  
や工女は、却て他より入り来る方になるだろが、否な  
く早くかくなしたいものだ、そこで之に必要の第一  
條件は放資家吸收の策だが、村の當局者の着眼は勿論  
幾多有志の方々は、今日迄の態度を更に進めて貯取の  
出づるを、入らしむるやうに盡力して貰ひたいもの  
である、

◎放資家吸收策には中々容易ならぬ問題で、吾々局外  
者が容易く考案すべきものではないが、要するに製造  
工場の如きものは追々建てたいが最後の要求である(一  
下手な考案なんか遠慮す)

◎肥薩鐵道全通の曉(もふ)二年の後に控へてゐるは、石  
炭等の供給は京阪地方の諸製造工場が、今日求め得る  
便宜(送貨迄)にまさるも劣らぬ有様になる筈だから、  
されば決して工場唯一の需要品の供給が不便なぞの  
嘆はなかるべき筈、ろして多數の工女男は又容易に得  
らるものとすれば、資本の有無は夫等諸工場の設立

如何に關する重大の因をなして、其設立する土地の  
何れかは續いて起る問題である、さらば其際吾が郷里  
はいかに、

◎之は只些細な工女男の出稼から考へた事だが、更に  
問題は他にいくらもある筈、在來加治木の工産物も相  
應にあるのだから、其製造者の數多きものは組合なり  
、株式なき組織にして、相當の技術者(必ずも技  
師といはず)を聘して隆昌發展の漸を計り、丁度北陸  
三縣(富山、石川、福井)の產業に於ける如き僅に二三  
萬の資本を有する織物、陶器、製糸、織物等の諸業が著しき  
發展の域にある如き事も眞似られぬでもあるまい、即  
ち陶器、製紙、鑄造、刀物、製糸、織物等の諸業を各  
確固たる組織の下に營みたいものである、さすれば何  
も之等に要する放資家のなきを嘆する事はあるまい、  
◎かかる域に進まぬでも只今にても必要だが、吾が郷  
里にも停車附近に物品陳列所を立てゝ出来るなら車中  
の旅客に迄郷里產出の製造品を目撃せしめ從て販賣擴  
張の途を講じたいものだ、もしや前述の如き他日諸工  
業が盛に起る日には、此等は當然一層の有力なる設備  
ではあるまいか、これは粗雑な点から考へても多少の  
注意を讀者に得たい望があるのでもし精細に考慮を盡

し一方經濟眼を以て見たらば、吾が郷里發展の策は更  
に多大の名案があるではあるまいか、  
◎時は晝夜の別なく立ち去り過ぎ行くにつれ社會の進  
歩は奔馬の勢で諸事發展一加之人口の増殖は著しく、  
物價の騰貴は底止する所なく、一方には贅澤奢侈の風  
益々加はるにつれ活難は愈々其度を高め、從て工女男  
の輸出所が稍もすれば此等の勢力に抵抗し兼ねて、や  
がては一家の出稼移住の如き寧ろ悲慘の風に見舞はる  
ゝ事なきにもしあるまい、されば郷里發展の途を講  
するは須臾も等閑にすべき時節であるまいと思はる、  
大方の諸賢此等につき多大垂教の仁を惜しむながらむ  
とをいのる、

### 福州雜錄 (繼承)

菊廻舍

登烏石山記

福州城中有山曰越王曰九仙曰烏石隆然成鼎勢稱三山城  
越王浩豁九仙平遠烏石則以奇峭勝其名最著相傳漢何氏  
引弓落鳥雲際或曰嶺有鴟浴地故名唐天保八年勅名閩山  
宋光祿卿程頤孟知福州謂此山登覽之勝可比道家蓬萊  
方丈瀛州遂名道山曾輩作記當時山有三十六奇云今歲甲  
辰十月余偕學生某往遊焉取路於白水庵拾磴而昇有

聖母廟廟畔榕樹張鵬翼其下奎光閣梅花如雪是爲劉氏別  
墅山上則奇巖重疊如累卵如兜帽如虎豹如臥牛其最奇者  
爲鯉石石生鱗紋首皆具又有藏六石高丈五尺偃然而橫其  
側有桃石亦奇絕壠有祠曰隣霄臺有朱子題字其側一圓石  
中央剖裂似鈴其右卽鴟浴地也此間有石必題字或楷草篆  
隸皆可觀其最著者爲般若臺銘在華嚴巖左昔有沙門持般  
若經於此不釋手唐太宗大曆七年御史李貢造臺李陽冰大  
篆般若臺記刻於右字徑一尺與處州新驛記繪雲縣城隍廟  
記麗水忘歸臺銘世稱爲四絕者也是爲山之最高處踞石放  
眸城内外民戶六七萬高樓傑閣如蟻垤屋瓦毗連如魚鱗而  
九仙之七層塔越王之鎮海樓巋然露頭角城外則鼓旗蓮虎  
諸峰列峙如屏東望閩江朝海渺々如銀蛇大橋架焉白帆往  
來宛然有幅畫之趣因憶此山城市之景不讓我邦愛宕田  
野之趣則似飛鳥而奇巖崛聳之狀則髮鬚於妙儀兼此三絕  
而在閩中則其聞於世固所宜也獨惜今人委此名山於蔓  
草中而不顧果何心乎歸途出沈氏廟下入而觀之庭園廣濶  
花卉雜植石徑竹斜幽僻入山巔一亭翼然頗富眺曠亭畔有  
石刻舊濤園三字屬此山稱石林爲明許豹別業施時有吞江  
松嶺烏跡露巖諸勝至後乃爲沈氏廟降磴入廟之正楹見勅

額曰忠孝成性燦然奪目沈氏名葆楨論文肅有文武材仕至  
兩江總督威豐間沈氏官江西廣信知府出他郡籌餉賊至廣

信城將陷夫人刺血作書請授兵自執爨犒軍士氣大奮城遂全至今傳爲美談夫人實林少穆之女也沈氏歿朝廷建祠寵旌之廟下有古梅兩株紅白相間清香襲人低回久之請一枝歸插瓶中作是記

## 雜

## 囊

(一の續き) 本田 親二

## ◎消化と滋養

衛生思想が進むに従つて滋養物を食ふと云ふ事が生活の最大要件となつて來た。それは慥に善いに違ひない、けれども世人は正當に滋養物の意味を解釋して居るかどうかは疑問である。試に人に向つて滋養物とはどんな物かと聞いたなら、皆直に鶏卵、牛乳、肉類等を以て答へるだらう。なる程此等の物は分折上人體に必要な蛋白質、脂肪等を多く含ひ故に滋養たり得るものである。いくら滋養物でも只腹に入れた丈では滋養にならない、消化しなければ駄目だ。胃が健全でなくして食物の消化が出來なければ、食物は胃中に永く停滞して腐敗或は酵素作用を起し、その結果血液を不純にし身体へ弱める。滋養ではなくて害蟲となる。即ち完全なる胃のみが正當なる滋養物を攝取する事が出来るのである。けれども近世の人間は過食の結果大抵胃を

健全なる胃を有する人は更に一步を進めて蠻的なる衛生法である。

胃となすべし。されば時々消化物を食ふて胃を練習させる事も必要である、然しそれに胃に害を與ふ又は胃を過勞せしむるのみで滋養分の少ない物はいけない。それから食溜及断食の練習は大に一旦緩急ある場合の助になる。平生でも旅行の時などは大に都合かい、僕の経験では一日中水の外何も食はなくても立派に脳を働かせ又五六里の旅行も出来る、殊に汽車旅行などで何も動かなくて辨當丈食ふのは贅澤の沙汰である。けれども身體的の労働者には腹力といふものが必要である。胃が全く空虚になると疲労し易い。それで労働者は比較的消化し難い物を食ふ方が總ての點に於て經濟的である。これに反して精神を用する人は少しが、この頃は牛乳がよく流行する。牛乳とは元來牛の仔が飲むべき爲の物で、それへ人間が横取りするのだ少々御門達ひである。又同ト人間でも小供は親の乳を飲むから牛乳を飲んだとて同ト様なもので平氣だが、大人が滋養だと云つてがぶく飲むのはよくない。牛乳は、

大人に取りては甚しい不消化物である。液体だから直に胃に吸収されうるものだが、牛乳は胃液に遇ふと凝結して堅い塊となる。その心まで胃液が滲み込んで皆消化させる迄には時間がかかる。それで時にはその間に牛乳が腐敗して下痢を起すことがある。それを豫防するには牛乳と他の固体の食物と同時に食へばいい。ろーすると大きな塊が出来ないから消化が早い。大人には子供程牛乳はきかない、既に生長を終つた人の滋養物としては卵の方がよさそうだ。

動物の肉は動物が死ぬと直ぐから一種の變化を始める、即ち内の蛋白質が僅かづく變形して數種の毒素を形成する。又身体の老廢物も幾分肉中に殘留して居るので新鮮な肉でも人間に何が悪い結果を興るゝと云ふ事は輓近の生理學者の多くの主張する所である。これに反して穀物、野菜等の如き植物性食物はかかる思がないので歐米でも菜食論者が大に勢を得つゝある。肉類は分折上滋養質は多い、けれども吾人は肉食の結果としては重に耐久の勢力を得ずして爆發的の激性を得る。この爲不健全な思想を導き易い。動物性の食物は其味かして一種の興奮を吾人に與る、其點に於ては酒と同様である。空元氣をつける爲に肉汁が

茶、珈琲、葡萄酒等と同様に用いらるゝのは尤である。凡て物には一利一害あるは免れ難き事で肉類とても、その滋養價が優に毒素の害を蓋ふに足るかも知れない。でも我々は動物のみで生活する事は出来ないが植物のみで生活する事は出来る、(水は例外)。昔の菜食論者は宗教及人道の立場から動物を殺すことの不可を説いて肉食を排したが、この頃は肉中の毒素が發見されてから菜食論が立派な科學的根據を得て來た。又植物性の食物丈では滋養分が足りないと思ふ人があるかも知れないが、それは杞憂に過ぎないと云ふ事は多くの學者及實驗家の主張する所である。

## 漫　　言

### 隨感錄

○必ずしも神秘の幕深き處にのみ潜まんや。毫末も私意の逞ましくせられざる、無理の存せざる、常に理と智と、而して情感の正しさ審判の行はれ得る處に、平凡にして生ける眞理は存すべし也。

○人は他に教ゆる前に自ら教へざるべからず。角を矯めんとして牛を殺すば、古來往々にして見る滑稽なる悲劇也。

○今の世は親が子を解せざる時代也。子が親を疑ふ時代也。兄弟相容れず、親友は乃ち敵なる時代也。夫が妻を信せず、妻が夫に隔心する時代也。理法を疑ひ、世を疑ひ、人を疑ひ、道義を疑ふ、うれ懷疑の時代也。

○食はんがために生くるか。生きんがために食ふか、疑ひ思はんがために生くるか。苦しき試練のために生くるか。抑も又死を怖れ、生くるか。生き居るが故に死ぬか。希望といふ勿れ、死は汝が最後の幕也。光明と云ふか、暗黒なる幕はやてが汝が永住の家にあらずや。

○似て非なるもの悟り一諦め一而して泣寝入り也。宇宙の實在、普遍の眞理は(若しありとせば)必ずしも然りといふにあらず、斯く思ひなせば堪ひ難き吾主觀の痛恨を纔に慰むるに足るといふのみ。世に謂ふ大なる

○科学萬能の世、物質文明の弊は世を擧げて貨殖<sup>ケ</sup>誦歌し、黃白に眩惑し、人間物質以外金錢以外別に至大至高の境地あるを解せざるにあり。徒に時代の潮流に煽られて雷同附和、自ら守る處なく、凜烈たる氣魄秋霜烈日を給くものなきにあり。

○今の世成功を云爲するもの何ぞ多くして、成功の眞意を了するもの何ぞあれ歎きや。人目を眩惑するが如き實利實績を社會に貢獻す、これ成功のすべてに非ざる也。身に六國の印授を帶び、駒馬百乘門閥を賑はす、是れ成功の全面に非ざる也。拮据營々徒に數萬の富を積み、腐心焦慮空しく勤奮に憧憬するが如きは論外のみ。抑も又人は何の故に成功せざるべからざるか、此問の意味を真正に了解する者は誰ぞ。而して又より正しき答を爲し得る者は誰ぞ?

○世に無名の教師あり、宗教家あり、學者あり、詩人あり。渠等は多く黙して名聞を世に求めず。靜修沈思、深く自ら教へ自ら培ひ自ら識らんとするのみ。光彩陸離たらざるも人格の美玲瓏として仰ぎ就くべし。

○人は眞理を足下に求めずして、徒に銀漢の高きを仰ぎて覺めんとするの傾向を有す。さはれ其存するや何べし也。

○悟り、特に宿命的諦めといふと雖、甚だしき卑屈と相伴ふこと屢々あると思はざるべからず。

○疑ひを疑ひとして叫ばしめよ。不平を不平として鳴らしめよ。理解の山巒として高く傲り聳ゆる處、疑惑の谷幽然として深く横はり、不平の流れ激浪澎湃として天に逆捲く。進歩と革命は此の土にありて求めらるべき也。

○悲觀可也、樂觀亦可也。されど根滯なき樂觀は殆し悲觀の極到達したる樂觀ならざる可からず。更に悲喜を超越したる精神實在ならざるべからず。佛陀十餘年の苦行すべて此境に到らんとする捨身的努力也。

○最も恐るべきもの獅子心中の虫也。汝をしてあらゆる窮厄の中に置かむ。汝をして渴せしめむ、汝をして餓へしめむ、然る後すべての誘惑をして汝の前に微笑し艶語せしむ。汝能く毅然とし、操守を持し得るか、尙ほ且つ從容として道義を説き得るか。「人心離れ危く道心離れ微也」と豈に古人の舊套語とのみ空しく喝破し去るべけんや。

○已にかく爲ざる可からずと決す、唯猛進あるのみ。劍は鞘を拂はれたり、斬らんのみ、否らずんば斬ら



以て專賣事業が國家財政に及ぼす影響を知るべき也。而して同出張所の重なる建物は、一本家突出家角家平家建一棟此建坪五十七坪五合、一附屬煤瓦倉庫平家建一棟此建坪七坪五合、一鹽倉平家建一棟此建坪二十五坪五合、一上家平家建一棟此建坪四十八坪、一倉庫大扣所平家建一棟此建坪四坪、一門衛所其他五棟此建坪四坪。

巍乎たる洋風の建物錦江の埠頭に聳へ、平潮穩波、藍然として沙溝ち來れば、白堊輪換の美燐として夕陽輝く時、日暮れて母の懷に返り来る幼子の如くも、白帆徐ろに風ぎの水面すべり來る光景と相俟ち、風趣宛然一幅の洋畫を見るにも似たり。

○稀有の積雪

本年は寒中余程暖かで、此分ならば當年は樂に春を迎へらるゝ事だと喜んで居たが、愈々明日は立春と云ふ二月の五日夜半からボツリ／＼と白い者が降り出した翌六日の夜が明けて見ると野も山も一面の銀世界には人皆驚かぬはなかつたが、積雪約七八寸より尺以上で北向家根なぞは四五日間も溶け切らぬ位であつた。此の如きは西南戰爭以來未曾有の事であるとは古老の話しである。

◎紀元節の祝宴會

二月十一日茅出たき紀元の佳節を祝せんが爲、祝宴會同旅團長は陸軍少將須永武義氏補せらる、

○知事交迭

明治三十二年以來、加納久宜氏の後任として、永く本縣の知事たりし千頭清臣氏は、昨冬十二月職を罷められしが、福井縣知事たりし阪本鉄之助氏此の程來任せらる、氏は愛知縣出身にして年齢五十有二、曾て岡山縣參事官東京府書記官を歴任し頗敏腕の聞ひあり、蓋し將來の縣治見るべきものあらんか。

○種痘

近來諸所へ痘瘡の發生せるに依り、豫防として先程より村内各小學校生徒を始め、一般人へ、種痘を施しつゝありしが、此際漸く全部結了せりと云ふ。

○紀念碑の起工

本村に於ては以前より日清日露両役の凱旋紀念碑建設の議あり、村兵事會に於て經費を費一千圓以内として、位置を稻荷神社の跡に定め、委員を設けて其形狀等に

以て專賣事業が國家財政に及ぼす影響を知るべき也。而して同出張所の重なる建物は、一本家突出家角家平家建一棟此建坪五十七坪五合、一附屬煤瓦倉庫平家建一棟此建坪七坪五合、一鹽倉平家建一棟此建坪二十五坪五合、一上家平家建一棟此建坪四十八坪、一倉庫大扣所平家建一棟此建坪四坪、一門衛所其他五棟此建坪四坪。

巍乎たる洋風の建物錦江の埠頭に聳へ、平潮穩波、藍然として沙溝ち來れば、白堊輪換の美燐として夕陽輝く時、日暮れて母の懷に返り来る幼子の如くも、白帆徐ろに風ぎの水面すべり來る光景と相俟ち、風趣宛然一幅の洋畫を見るにも似たり。

○稀有の積雪

本年は寒中余程暖かで、此分ならば當年は樂に春を迎へらるゝ事だと喜んで居たが、愈々明日は立春と云ふ二月の五日夜半からボツリ／＼と白い者が降り出した翌六日の夜が明けて見ると野も山も一面の銀世界には人皆驚かぬはなかつたが、積雪約七八寸より尺以上で北向家根なぞは四五日間も溶け切らぬ位であつた。此の如きは西南戰爭以來未曾有の事であるとは古老の話しである。

○紀元節の祝宴會

二月十一日茅出たき紀元の佳節を祝せんが爲、祝宴會同旅團長は陸軍少將須永武義氏補せらる、

○知事交迭

明治三十二年以來、加納久宜氏の後任として、永く本

ところ夢からずと云ふべし。

○旅團設置

昨年軍備擴張の結果として、我鹿兒島へも旅團を設置さるゝ事となりしか、既に伊敷四十五聯隊に設けられて、同聯隊並に都城六十四聯隊を統轄するに至れり、同旅團長は陸軍少將須永武義氏補せらる、

就き調査中なりしが、諸種の説出で來りて一定せず、近來に至りては或は公園の開設、或は圖書館の設置等

、紀念に併せて實益の伴ふものとしては如何との説もありて、永く考究中なりしも適切のものなく、終に之を鉄製の榴彈砲形にして、上口には旅順口にて得たる砲弾を据付け、地上數段の石階を築きて、其上に之を建置する事に定め、總高二十四尺工事は鑄工、石工の兩部に分ち、鑄工の部は當町森山正助氏二百廿餘圓にて、石工の部は反土西吉原市左衛門氏六百九十餘圓にて請負目下何れも着手工事中なれば、今後數月の後には仮屋坪の中央に一大壯觀を呈するに至るべし、

○稻荷神社移轉

稻荷神社は元島津家の宗社にして、加治木城趾の東隅に在りしを、此處に明治二十九年中學校設置の際、今處へ御遷座ありて、參詣者常に絶へず、殊に月の三日には例祭ありて、毎月盛況を極めぬ、然るに我島津家は曩に報する所ありしが如く、昨年來舊日木山邸跡に、廣大なる梅園を開きて扇和園と名け、以て當村繁榮の策を盡せられしが、今春尙開墾を續け、梅樹の植付、園内の手入等に着手されぬ、今又同家に於ては、右稻荷神社が元無資格社にして氏子なるものを有せざ

れば、後來同社の維持祭典等の事を慮られ、終に同園内に御移轉の企あり、位置は高燥にして幽邃閑雅最適の地たり、同園爲めに一層の佳趣を添へん、而して現社地は、凱旋紀念碑の敷地に充てられぬ、一舉両得の良策と謂つべき也。昨今其工事中なるが、我村民は奮て労力又は金品樹木等 寄附して、其の竣工の速かな

らんことを祈りつゝあり、而して親しく之に干係して日夕監督の任に當れるは、新納時亮犬童英輔の両翁にして、其他の有志又助効しつゝあるは喜ぶべき事なり、

#### ◎上村農會長の表彰

本村長兼任村農會長上村與八氏は、農事熱心家にして自ら鋤鋏を探り、牛馬を追て田圃を耕し精農の聞名あり、嘗て九州沖繩八縣共進會の米麥審査委員たりしとあり、尙明治三十七年以來、本村農會長として斯業の改良發達に付大に努むる所あり、其効績淺からず、是以て此程大日本農會總裁伏見宮より左の賞狀を授與せらる實に名譽と云ふべし、因に記す同時に同褒狀を受けたるもの、本郡内に東製山村農會長細山田諸太郎、栗野村農會長池田彦熊の両氏ありたりと云ふ。

#### 名譽賞狀

鹿兒島縣姶良郡加治木村

#### 農事改良の獎勵及實行

右功績顯著なるを以て本會農事改良獎勵法に依り茲に之を表彰す

明治四十年十二月三日

#### 大日本農會總裁大勳位功二級貞愛親王

#### ◎上戸黨の福音

先年鹿兒島市に於て清酒釀造家の失敗ありてより本縣の酒造に一大頓挫を來し、全縣を通じて殆んど皆無の姿となり、僅かに三年前より市内藤安方に於て釀造するの外數ふるに足る者なかりしが當村郷山周藏氏は大に茲に慨する處あり、奮つて從弟清氏を大藏省の直轄なる王子の釀造試驗場講習生として上京せしめ熱心研究する處あり、業を卒へて歸來種々の準備を整理し同期生たる杉田靜治氏と共に本年一月試驗的に清酒五石の釀造をなし、稅務監督局鑑定部の鑑定を受けしが成績頗る良好にして從來の改正酒は兎角甘味多く濃厚にして嗜好家の爲め嫌忌せられしが本品は酒質輕快淡泊にして酸甘味強からず、五味の配合調ひ居り少しく苦味強き感あるも、本酒は未だ製成せし鑑の者にして新鮮なるに基く者なれば、之を垂引火

入等を爲すに於ては、苦味は引直り醇良の者となるべしと云ふ尙ほ目下第二回釀造準備中の由なるが追々販路擴張の曉には用水地なる栗野に釀造會社を設置する豫定なりと云へば、遂には從來多額の輸入酒を凌ぐ機運も到來すべく、上戸黨の福音は勿論實に本縣の爲め喜ぶべき事と云ふべし、今其分拆成績を掲ぐれば

性狀は淡黃色透明酸性にして淡泊芳香を有し味醇美攝氏十五度に於ける比重は○・九七八なり

#### 分拆成績

酒精分	一八、七(容量)	越幾斯	二、一五二
遊離總酸	○、二五七二	揮發酸	○、〇一〇二
不揮發酸	○、二四七二	灰 分	○、〇七三三
磷 酸	○、〇三四九	糖 分	○、〇〇三〇
糊 精	○、三七三五	蛋白質	一、四一八四
防腐劑	檢出せず		

先に日露の國交破、いや大本營附通譯官として出征し功勞少からず平和克復の後引續き満州に留り目下安東新報社長として大に活動を試みつゝある小濱爲五郎氏は今般歸省されたるを以て去二月十七日天理教會に於て慰勞會催されたり、出席者七十余名一同着席配膳了

#### ◎小濱氏慰勞會

先に日露の國交破、いや大本營附通譯官として出征し

#### ◎陸軍紀念祝賀會

三月十日の陸軍紀念祝賀會は當町天理教會堂に午後三時より開催されたり集まる官民壹百余名上村村長祝賀會の辭を述べ天皇陛下並に陸軍の万歳を三唱し奉りて式を終へ直ちに盛なる祝宴は開かれ黄せ昏無事散會

り因に云ふ同會の祝酒は本村州崎の郡山周藏杉田誠助氏等より寄贈せられしものなるが右酒は別項所記の通郡山清、杉田靜治の両氏が先きに東上し全酒釀造研究せられし丈ありて其味頗る賞美するに足れり

### ◎名譽なる馬

本縣春季大競馬會は三月九、十の兩日間天保山の原頭に於て執行された非常の盛況を呈したる由なるか當日の花たる婦人財臺競馬には本村新名忠右衛門氏の持馬、高千穂號名譽の月桂冠を占めたりと、同馬は去二月濱ノ市に於ける始良郡競馬婦人財臺競馬の際も第一着の名譽を得たる由なるが誠に名譽と曰ふへし、昨秋は本縣馬匹共進會に於て山下氏の持馬第一等の榮選に入り大に名聲を博したるに今亦本村より斯る駿馬を出す本村の面目と曰ふべし、

### ◎石原農商務省技師の講話

縣下各所に於て今度石原技師を招聘し、主として園藝に関する講話會を縣主催となりて開くことなりしが、本村に於ても去る三月十五日女子高等小學校に於て開けり、技師は静岡縣興津農商務省園藝試驗場在勤にして、甲東先生の甥に當る人なり、多年佛國に於て園藝に關する學術を研究せられ我國有數の園藝家たり、氏

### 合十郎氏も同隊會計主任として同行せり

#### ◎新知事の來加

マ此頃新任されたる阪本知事には當市學校卒業式へ臨席の爲め去月十八日二番列車より來加せられたり。卒業式臨席の後郡役所男女両小學校稅務署及專賣局加治良知宅に至り親しく同業の狀況を視察せられたりといふ。両小學校にては特に兒童を校庭に集めて初對面の挨拶と叮嚀なる訓諭とを述べられし。

#### ◎美事一束

野田昇平氏は亡妻つた子の五十日祭費を節して金拾圓を。福井秀彦氏は亡父の五十日祭費を省き金貳拾圓を。

長谷源唯二氏は亡祖母の五十日祭費を省き金拾圓を。川畑助右衛門氏は祖先の年忌祭費を省き金拾圓を。就れも學校基本財產の中へ寄附せられたりと云ふ斯る篤志家が年々歲々出て来るは喜ぶべきことならずや。

#### ◎衆議員選舉有權者調數

我加治木村に於ける衆議員選舉有權者は五年前に比して殆んぞ倍數以上に達せるが多少増徵稅の增加に依らずと雖も又總て如何に經濟界の趨勢を窺知するに足らん乎試に鹿児島縣内郡別並に始良郡内村別數を比較す

れば

明治四十年十月

明治十六年十月

加治木村	三八七	一八〇
帖佐村	三三〇	一四〇
蒲生村	三三九	一三四
重定村	二二三	三二
山田村	二二〇	八九
溝邊村	一六九	五八
横川村	二二三	九四
栗野村	二六七	八四
吉松村	一八三	七七
牧園村	一八三	七二
東襲山村	二〇八	四〇
西襲山村	一八三	四
清水村	一九五	一七七
國分村	一五六	
東國分村	二一四	九四
西國分村	三〇五	一四九
根山村	一八九	五五
福山村	一六一	三五
鹿兒島縣	九二七	鹿兒島郡
鹿兒島市	九四八	一四三七
揖宿郡	二八八六	一八五四
日置郡	二八八六	四九五七
出水郡	二〇三四	伊佐郡
		一二六七

は當地に來村さるゝや先づ藏王岳麓なる曾木彥二氏の柑橘園に臨まれ、種々の視察をなし暫時新納方に休息し梨、葡萄等に就て當地の剪定示教あり、午後一時頃より講話會に臨み約二時間に涉る熱心なる講話あり、氏は果樹として最も本縣に適するは柑橘李葡萄の三種にして、殊に本縣は氣候至て温暖なればチープルオーレンジの如きは有望なるを以て、生産者は種類を一にし幾等でも注文に應する様同業組合を組織するは最も必要なりと、尙施肥、剪定、病虫害驅除、果實の荷作り等に就て詳細なる談話あり、後ち有志者の龍門庵に於ける招待の宴に臨み終列車にて歸魔されたり、因に記す當日の同行者は前野縣技師新納縣農會幹事鹿兒島兩新聞記者其他數名なりき

### ◎長途騎兵乗軍の通過

熊本騎兵遠乗隊去る三月十七日午前五時頃鹿兒島を發し午前十時過ぎ當地を通過せしが、當日は降雨劇甚なりしも人馬共に勇氣凛々として些も疲勞の態なく、網掛橋河畔に廿分間休憩したる後都城へ向けて出發したり、向江町街上には各學校學生其他一般歡迎者を以て人山を築きぬ、當地兵事會よりビール菓子等を贈り勇士の勞を慰めたりと云ふ因に本村出身陸軍三等主計兒玉

學事一班（期三）

卷之二

一 耕地の坪數、九二五坪、校舍の坪數、四七坪、運動場四六〇坪、樹栽地六〇坪

り缺く、准教員一人、代用教員三人、補助教授者一人、専科教授者一人、

三、職員氏名と在職年數(三月迄)  
美坂吉之助六年十月、中村與一郎十二年五月、宮内七之丞十

三年七月、下津佐正治二年七月

月、正月巳酉日、二月

四 在學兒童數字別  
兒童數三百四十一

字別	出席獎勵のため	に十一學區域に分つ
鹽入	女百五十五人	百四十七人
須崎	七十七人	一百四十一人
中福良	四十八人	一百四十一人
勒中	二十八人	一百四十一人
新彌原	十九人	一百四十一人
十五人	十六人	一百四十一人
	濱村	一百四十一人
	十六人	一百四十一人

勸儉貯蓄の

八年二月四日より斜本年三月十日まで切手を取次ぎし金額  
積り積りて參百五拾圓有餘に上れり是れはすべて零碎の金  
が斯る多額に及びしものなり

十一  
卷之三

七

十一 紀念植

金銭等の支拂ひに於ては、年利五%の利息を以て、年間の利息を償ふて余りあり。配法は繁雑而効能なるも、價格低廉なるを以て、一年間に莫大の得あり之を以て、繁雑而効能を償ふて余りあり。

校に於て開會せり、出會者拾八名、先づ會務、會計及歴史資料調査に關する報告あり、次に會則改正及緊要事項につきて決議するところありたり。左に四十年度に於ける本會の事業及會計につきて摘要せしも、是題

紀念すべきものなるべからず即校の周園に樟樹の苗數  
十本購入して明治三十七年十一月樹栽せしに今や生長繁茂  
して夏日炎天の時には綠陰の下にて暑を避くるを得るに至  
れり突貫井の側に枝垂柳一樹あり是れは其當時校醫たりし  
杉田平助氏の赤十字社看護醫として明治三十七年九月二十  
六日出征告別のため來校紀念のために柳樹の一小枝を挿植  
せられしに今や高丈餘に及べり該氏は挿植の時語りて曰く  
この柳樹生長せは余が身体健全にして職務を全ふすること  
を得るも中途にして斃るればこの樹は枯死すべしと果して  
一大戦役は空前絶後の大捷利に歸して無事凱旋せらる柳樹  
は能く生長して年々に繁茂せり之を見て其當時を思へば萬  
感湧出して追憶の情に堪へざるなり

地理學十二

◎本村同盟教育會と教員會

八、家庭との連絡  
通知表を設けて各兒童の保護者に該業操作其他注意事項を記載して通知し且懲和會及運動會を開催して兒童の智的方面との活動如何を觀察せしむ

一、區域毎に組長あり組長は上級生徒を之に充つ今や出席率  
合は大に面目を一新して百比九八・九の間を往來す須崎地  
方は出席の歩合極劣等なりしが向學心の進みし結果百比九  
六、七臺に上り此の現象誠に喜ぶべし

且出席状況各學級各字の出席比較を詳細に調査して獎勵  
坡舞せり

自治心養成

第二學年以上の兒童は自分の事は自分にて處理して勤勞に耐える習慣を養成させることである。

(七十三) 城

(七十三)

あり、午後は協議會を開きしが、一尋常第五六學年の理科教科を調査するの件、一理科教材を研究すること及其方法、一圖畫及唱歌教授法を研究するの件、一校外に於ける生徒監督法、其他數件につきて熟議を凝らし、了つて茶話會に移りしが、閑談快語の裡に或は知見を交換し、或は親睦を厚ふするなど、各自の益するところ勘からざりしと、當日の來會者本村各學校職員及學務委員等四拾四名、今や我村事業は各方面に着々發展の緒につきつゝあるの時、教育事業又日を追ふて改善進歩の運に向ひつゝあり、されど義務教育は延長され、外部の擴張に將た内部の充實に、施設研究の餘地尙多々ありて存せん、これ等は村當局者の決心はもとより、本會の盡力に俟つて始めて完成を期すべきものなり、吾入は本會員諸氏が一致協力以て本村教育の爲め盡瘁あらんことを望むものなり。

### ◎各小學校証書授與式

本村各小學校に於ては左記の通証書授與式を舉行せり

三月廿一日

松城男子尋常高等小學校

全廿二日 龍門尋常小學校、中野尋常小學校、  
全廿三日 榛城女子尋常高等小學校、  
小島尋常小學校

高等小學校卒業生左の如し  
男子六十二名、女子四十二名

### ◎學藝會

松城女子尋常高等小學校及同校附設補習學校に於ては去月五六の兩日學藝會を開催した今其狀況を左に記す

会の目的を擧ぐると屈指に遑あらずであるが、主として兒童に及ぼせる教師の教化力を察し兒童の心意發展の狀況を學年に通じて察知する事と、父兄や母姉をして學校に近寄らしめ且教育の摸様を知らしむる爲と

であらう、斯る目的の下に種々の方法で材料を撰び或は演者を定め、兩日共午前九時半より開會、先づ君が代の唱歌を合唱し校長開會の辭を述べ夫より學藝に入り午後三時半金剛石の唱歌を歌て後會を閉ぢた。

五日の會は尋二三高一四補二にて、3の演せし回數凡四十二、六日のは尋一四高二三補一での回數全しく四十二、談話あり、朗讀あり、對話あり、作法あり、席畫あり、英語あり、席書あり、算術あり、暗誦あり、裁縫あり、理化實驗あり、遊戲体操あり、機織染色ありて、一々列舉するわけにゆかぬ、五百に餘る可憐の

少女等か、われ劣らト演壇に立ち、能ふだけのせいをだして說話し、動作する有様は、いかにも感せずに居られない、數多き母親の中には、嬉しさうに小首を傾げて凝視し、手足に力を入れて我子の演するのを助くるかのやうと見ゆるものあつた。

一般の人もよく注意して觀たやうだ、生徒もまた眞面目で平素の教授に對し、一層注意するの必要を悟つたと云ふことは、彼等が話す言語の裏にも、又其眉宇の間にも、ありくと見へて居た、然らば會を開いた目的の一部は達せられたと云つてよからう、父兄母姉の出席も大變で、廊下や講堂は肩摩轂擊どころでなく、實に立錐の餘地なしと云ふ程であつた、來賓もまた多かつたが、重なる方々は郡長と郡視學、村長、學務委員、小中學教員等で隨分賑うた、

### ◎中學校舍の一部落成

加中新築校舎は、長さ四十四間ありて、普通教室八十坪、特別教室二十坪、教員室二十八坪、校長室十

二坪、事務室十六坪、應接室八坪、廊下五十六坪にして、總計二百二十坪、建築堅牢にして灰白色のペンキにて之を塗り頗壯麗なり、昨秋工事に着手し、工費

九千貳百余圓を要して、本年一月工を終へぬ、依て同

加治木中學校本年卒業生は四十七名にして、内本村出身者十一名あり、其氏名左の如し、しかして同卒業式は、去る三月十八日に行はれ、新任知事阪本氏等の臨席ありて頗る盛なり」と云ふ

右の内迫斗藏は、學力優等品行方正、鈴木三雄は、精勤、林義彦は、武術精勵に由り賞品を授與されたり、

永原尋常小學校

迫斗藏 天山常蔵  
鈴木三雄 野崎 恵 小濱 豊藏  
津崎直志 田方貢 原田英二  
林義彦 敬次郎

○商船校入學者  
昨年當中學校を卒業したる竹下祐友氏は、昨秋來東京へ遊學中なりしが、先きに東京商船學校生徒募集試験に應じて、首尾よく合格し、此程入學を許可されたりと云ふ、

### ○會員動靜

- 本會長島津久賢男には政況視察旁々私用を帶び滯在約一ヶ月位の豫定を以て去る二月廿二日出帆の滋賀丸に搭乗上京の途に就かれたり。
- 清國安東縣安東新報社長小濱重吉氏は去る二月以來歸省中なりしが三月中旬再び渡清。
- 清國營口松茂洋行員小濱重吉氏は病氣保養の爲め家族携帶歸省中。
- 清國北京大學堂敎習野田昇平氏は冬期休暇を利用し歸省中の處去る二月十八日出發歸任。
- 大坂大同生命保險株式會社總務課長城川善藏氏は被保險者募集の用務を帶び暫時歸省の處去る二月中歸坂。
- 當壇專賣所詰の曾木貫二氏は先般牧園種馬牧場に勤務因に氏は此程栗野の人川池さや子と華燭の典を舉げらる。

○會員福永十郎氏は本誌和歌選評者として尽力中の處去る一月十五日腦溢血症に罹り溘然不歸の客とならる。

○會員日野辰二氏は鹿兒島在住中の處先般當地に歸住する。

○岸野謙吉氏・縣屬を辭し鹿兒島大林區署に轉任せらる。

○當地出身の陸軍步兵少尉日高七之助氏は此程中尉に昇進せらる。

○熊毛郡・久島に教鞭を執り居りし万膳重雄氏は過般稅務署稅務屬に任ト大島在勤を命ぜらる。

○一年志願兵として入營中なりし吉村新藏氏は満期除隊三月始め婦省せらる。

- 明治三十二年以來當中學校武術師範たりし野村勝次郎氏は二月中旬全校を辭して專賣局當出張所在勤となる。
- 本誌編輯員たりし竹下貞一氏は同トく三月中旬渡清せらる。
- 會員平山彌太郎氏は一月松城男子校教師とななる。
- 曾木實、石原精一の兩氏は去る二月廿日渡米。

### ○讀者之聲

▲日露戰役紀念碑建設の費用を以て黒川山に櫻樹を植付け山又山の奥迄も櫻花爛漫たる別天地を開ける一大公園を建設せよ之れやがて諸士が戰場に花々しく散りたる武士の本領を遺憾なく發揮せる好個の紀念碑にあらずや(やまと武士)▲艷陽三月希望に満てる本誌も今や理想の蕾を破らむとして幽腹人を襲ふ……噫幸多き

松城城下の花よ一輪願くば永へに健在なれ!(綠波)▲折角文明の利器が發明されたのに利用せぬとは餘り氣轉が利かなざ過さる。川内は鐵橋も架してある處だけ

に流石は敏迅ひ、電話が通じてゐる、片田舎の大口でさへも殆ど戸毎に、電氣燈を點してゐるには、奈麼したの

か加治木は寂びしい、電話はなし軒燈さへもない、夜街路を歩いても町とは思へぬ。怜悧な人間にしてはれ

先きの見ぬ話だ。所謂氣が利いて間が抜けたものか(赤毛布生)▲最も少し紙數を増して貰ひ度い僅か一

二時間にて読み終るやうでは樂みが少ないやうだ(愛讀生)▲君と同ト注文は毎度受けて居るので我々も紙數を増し記事を豊富にして諸君の満足を買ひ度いのは

### ○本會之會報

#### ○本會の基本金寄附者氏名

(第四回申込順)

金拾圓	小野助四郎君	金拾圓	神田 伸二君
金拾圓	田中藤兵衛君	金六圓	郡山 周藏君
金五圓	藤崎 英次君	金五圓	榎七君
金五圓	竹下 貞彦君	金五圓	松田傳之助君
金五圓	井尻 松雄君	金五圓	杉田 平助君
金五圓	美坂銀次郎君	金五圓	吉村 新三君
金五圓	城川 善藏君	金五圓	小濱雄太郎君

